



2010年7月発行

オリーブの若葉

鳩は夕方になってノアのもとに帰って来た。見よ、鳩はくちばしにオリーブの葉をくわえていた。
(創世記8章11節)

ニューヨークの国連本部にオリーブの葉をくわえたハトの絵があります。平和の象徴ハト、それは毎年8月に行われる原爆投下の日の式典でも主役を演じています。人々のハトに託した願いと、「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませぬから」という言葉は明らかにつながっています。あの戦争の時、「神様、もうこれ以上お怒りにならないで下さい」と祈り続けた心が、ハトを空に放すことに受け継がれています。広島で、長崎で、そして世界の各地から放たれたハトはオリーブの葉をくわえて戻ってくるのでしょうか。

大洪水の渦中、箱舟は水の上で木の葉のように揺れています。嵐の中、箱舟の狭い部屋の中で、身をよせあい、必死に祈りを合わせているノアとその家族を想像してみてください。みんな、自分たちにも迫ってくるだろう神の審きを思って、おそれおののいていたのです。ノアにとって世界はまさに滅びたのです。

しかし神を信じる者には滅びから免れる道が用意されています。8章1節で「神は、ノアと彼と共に箱舟にいたすべての獣とすべての家畜を御心に留め」られたと書いてあることは大きな意味を持ってきます。神はそのことを、風を吹かせ水を退けられることによって示されました。大洪水が始まった日から150日後から水が減り、第七の月の17日に箱舟はアララト山の上に止まりました。第十の月の1日に山の頂が現れました。それから40日たって、ノアはようやく窓を開いて、からすを放しました。

ノアはどうして40日もの長い間待っていたのでしょうか。それは彼が、神のこれほどまでに恐ろしい世界への審きを目のあたりにして、恐怖と不安に打ちのめされ、何をする気持にもなれず、箱舟の隠れ家の中でじっとしていたからだと考えられます。しかしいつ

までもそうしているわけにはいきません。ノアは重い腰を上げて窓を開け、からすを放しました。しかし「出たり入ったりした」だけでした。続いてハトを放しましたが戻ってきました。地上はまだ水びたしだったのでしょう。

ノアは一週間待ってもう一度ハトを放しません。ハトは夕方になって戻って来ました。そのくちばしにオリーブの葉がありました。オリーブは山の上に生える木ではなく、背の高い木でもないで、これは山岳地帯だけでなく遠方の平地からも水が引いたことを示しています。

期待をこめてハトを空に放ったノア、暮れなずむ空を見上げてハトの帰りを待つノア、それは一枚の絵を見るような光景です。オリーブの葉を見たとき、ノアと家族の胸はどれほど感動にうちふるえたことでしょうか。箱舟を出る日は近い。しかし彼は神が命令をくだされる日を待ちます。

第二の月の27日、神の言葉を待って初めて、ノアと家族、動物たちは箱舟を出ました。神はかつて呪われた地に再び祝福を与え、いのちの満ちあふれる所となそうとしています。

こうしてみますと、オリーブの葉によって伝えられたメッセージの何と意義深いものだったのでしょうか。それは神と人間の間の平和、そして人間と人間、人間と自然の間の平和を伝えてきたので。

神はお怒りをとかれしました。呪いから祝福へ。新しい世界が生まれ変わった人間と動物たち、そのすべての子孫の前にあります。

規模こそ違え、これは私たちが礼拝を終えた後再び教会の外の世界に出てゆくことと重なる歩みではないかと思うのです。オリーブの葉はすでに皆さん一人一人の心に届けられています。ですから神に従ってこの世で歩んでゆくときに、主イエスのこのみ言葉は私たちから決して遠いものではありません。「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」。

(2010年7月18日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊